

宮城県における子育て支援の実態（5）

— 地域子育て支援活動についての訪問調査 —

杉山 弘子・東 義也・佐藤 陽子・石田 一彦

宮城県内の地域子育て支援活動の現状と課題および意義を深くとらえるために、訪問調査を行った。対象は保育所12ヶ所、幼保一体型施設2ヶ所、幼稚園8ヶ所、独立型の子育て支援センター2ヶ所である。保育所の内10ヶ所に子育て支援センターが併設され、幼稚園3ヶ所に幼児教育センターが設置されている。実施の時期は2005年1～3月である。地域子育て支援活動の取り組みの経緯と2004年度の活動について尋ねるとともに、支援活動の意義と課題をどうとらえているかを聞き取った。地域子育て支援活動へのニーズは実際に増大している。地域子育て支援活動の取り組みは、親に友だちができることに大きな意味があるととらえられている。また、未就園児を対象にした幼稚園での取り組みは、友だちとの遊びや関わりを経験する場と位置づけられている。施設の種類の問わず、親子にとって意味のある活動を充実させていくための予算の確保が課題になっている。

キーワード：地域子育て支援活動、子育て支援センター、保育所、幼稚園

<目 的>

杉山らは、宮城県内の全ての認可保育所および幼稚園を対象に、2003年度の地域子育て支援活動についての質問紙調査を実施した（杉山他、2006a；東他、2006a；杉山他、2006b；東他、2006b）。在園児以外の地域の親子への支援活動の実施状況と課題を明らかにすることが目的であった。その結果、保育所、幼稚園とも担当者の配置や場所の確保等、条件面での課題が大きいことが明らかになった。しかし、こうした中でも内容面での充実を図り、地域・保護者のニーズに応えようと取り組んでいることもわかった。地域子育て支援センターが併設されている保育所の場合は、専任の担当者が配置され、支援活動の種類や実施回数も多いが、必ずしも条件が十分に整っているわけではない。支援センターが設置されているか否か、また保育所か幼稚園かを問わず、各施設が今ある条件の中でやりくりし、工夫をして取り組んでいることが窺われた。子育て支援の今後のあり方を展望するためには、その現状を把握することが重要と考えられる。

本研究の目的は、2003年度地域子育て支援活動についての質問紙調査の結果を踏まえながら、支援活動を実施している施設への訪問調査を通して、宮城県内の地域子育て支援活動の現状と課題および意義をより深くとらえることである。調査対象には県内各地の公立および私立の施設を含むようにした。保育所については地域子育て支援センターを併設している園を中心にしながら、センターを設置していないが専用の場所があるとする園および専任の担当者がいるとする園を訪問することにした。また、幼稚園・保育所と支援センターが併設している施設も対象とした。幼稚園については、幼児教育センターを設置している園と、支援活動の実施回数が多い園を中心に選んだ。さらに、質問紙調査の対象ではなかったが、独立型（保育所への

併設ではない) 子育て支援センターについても訪問調査を行うことにした。合わせて24ヶ所の施設を訪問し、各施設の子育て支援活動への取り組みの経緯と2004年度の活動について聞き取りを行うとともに、可能な限り施設および支援活動の実際を見学することで、各施設の条件とその中での工夫、地域のニーズに応じた内容づくり、実施してみての問題点と課題、支援活動の意義としてとらえられていることを把握できるようにした。

<方 法>

1. 対象：宮城県内の保育所12ヶ所（公立3ヶ所、私立9ヶ所）、幼保一体型施設2ヶ所（公立）、幼稚園8ヶ所（公立1ヶ所、私立7ヶ所）、独立型の子育て支援センター2ヶ所（公立）の合わせて24ヶ所を対象とした。保育所の内、私立の2ヶ所を除く10ヶ所に子育て支援センターが併設されている。また、私立幼稚園の3ヶ所に幼児教育センターが設置されている。保育所・幼稚園が公立か私立か、所在地が仙台市内か市外か、担当者が地域子育て支援活動の専任か他の職務との兼任か、専用の場所があるか、出前保育を実施しているかを表1に記した。
2. 時期：実施の時期は2005年1～3月である。
3. 手続き：共同研究者が1名ずつ各施設を訪問し、聞き取り調査と資料の収集を行った。その際、可能な限り、子育て支援活動の場所と実際の展開を見学する。訪問時間は、聞き取り調査のみの場合は30分から1時間、見学を含む場合は1時間30分から2時間ほどである。
4. 聞き取り調査の内容：地域子育て支援活動の取り組みの経緯と2004年度の活動について尋ねた。また、地域子育て支援活動の意義と課題をどうとらえているかを聞き取った。

表1 訪問調査の対象

	訪問施設	公私	地域	担当者	専用の場所	出前
1	A 保育所・子育て支援センター	公立	仙台市内	専任2名	あり	なし
2	B 保育所・子育て支援センター	公立	仙台市外	専任3名	あり	あり
3	C 保育所・子育て支援センター	公立	仙台市外	専任1名、兼任1名	あり	あり
4	D 幼稚園・保育所・子育て支援センター	公立	仙台市外	専任2名	あり	なし
5	E 保育所・幼稚園・子育て支援センター	公立	仙台市外	専任2名	あり	あり
6	F 保育園・子育て支援センター	私立	仙台市内	兼任2名	あり	なし
7	G 保育園・子育て支援センター	私立	仙台市内	専任2名	あり	なし
8	H 保育園・子育て支援センター	私立	仙台市内	専任2名	あり	なし
9	I 保育園・子育て支援センター	私立	仙台市外	専任3名	なし	あり
10	J 保育園・子育て支援センター	私立	仙台市外	専任2名	あり	なし
11	K 保育園・子育て支援センター	私立	仙台市外	専任4名	あり	あり
12	L 保育園・子育て支援センター	私立	仙台市外	専任1名	あり	あり
13	M 保育園	私立	仙台市内	兼任2名	あり	なし
14	N 保育園	私立	仙台市外	専任1名	なし	なし
15	O 幼稚園	公立	仙台市外	兼任	なし	なし
16	P 幼稚園・幼児教育センター	私立	仙台市内	専任1名	あり	なし
17	Q 幼稚園	私立	仙台市内	専任3名	あり	なし
18	R 幼稚園	私立	仙台市内	専任2名	あり	なし
19	S 幼稚園	私立	仙台市内	兼任	なし	なし
20	T 幼稚園	私立	仙台市内	兼任	なし	なし
21	U 幼稚園・幼児教育センター	私立	仙台市外	専任1名	あり	なし
22	V 幼稚園・幼児教育センター	私立	仙台市外	専任4名	あり	あり
23	W 町子育て支援センター	公立	仙台市外	専任1名	あり	なし
24	X 町子育て支援センター	公立	仙台市外	専任2名	あり	あり

<結 果>

見学と聞き取り調査で得られた内容を、保育所および併設された子育て支援センター、幼稚園、独立型の子育て支援センターに分けて、施設ごとに記す。なお、幼稚園と保育所が一体型の施設と併設のセンターは最初のグループに入れて記す。

I 保育所および併設された子育て支援センター

1. A保育所・子育て支援センター（2005年3月10日 訪問）

年間20回の遊びの広場のほかに園庭開放（月～金）、親子のつどい、育児講座、離乳食や幼児食講座、体験保育、絵本貸し出し等多くの充実した活動を行っている。育児講座は心理面や健康等に関する専門家が講演する。音楽遊びでは音楽療法士も指導に関わっている。栄養面では保育所の栄養士が指導に当たっている。

児童センター、市民センターとの共催事業も年間7回行っている。他の施設の職員との交流も活動の枠を広げより充実した活動が出来ている様子。地域の子育てに関わることが保育者の資質向上につながると認識している。子どものサポートのみでなく親へのサポーターになる努力もみられる。毎月500部のセンター便りを発行している。保育相談も増え続けている。去年300件、今年800件、相談は支援のスタートとして捉えている。開所当時は職員間に垣根があったが今は互いに協力し理解しあっている。

このままセンター利用の希望者が増え続けたらどうするかという問題がある。支援室開放を週2回から週3回にしたが去年より増えている。食の講座は人数制限しているが、人気が高く断ることも多い。園側の準備が大変。児童センター等との協力関係まで発展させている。

2. B保育所・子育て支援センター（2005年2月10日 訪問）

園舎内に子育て支援センターがある。出入口は別で、センター専用の場所として活用されている。トイレや相談室も完備されており、保育所のホールとつながっている。専任スタッフが3名おり（一人は臨時職員）、センター独自の行事や自主的に生まれた子育てサークルの行事、そして、合同行事など全部で年30回近くの行事を展開している。主に自然体験、古来の行事を大事に考えているとのことだった。その他、年2回託児つきのリフレッシュ講座がある。託児は、センター職員とサポートセンターの託児ボランティアにお願いする。

センターの遊び場の提供は毎日。登録制でないので、急に來ることもある。多いときは30組。宣伝は広報による。稲刈りの時期などは、一時預かりの要望があるとのこと。

子育て不安からセンターに來て、そこから作られた自主グループ・子育てサークルは平成12年に始まった。（現在0歳児サークル15人、1～3歳児サークル30人）。保健師との勉強会なども行っている。

問題として、母親たちの教育力の低下をあげていた。しかし、センターに集まることで親同士の、また、祖父母たちの子育ての方法（叱り方など）を見られるのが利点であるとのことだった。

3. C保育所・子育て支援センター（2005年2月15日 訪問）

専任スタッフは1名だが、二人いる臨時保育士のうち一人ずつ交替で、週2回の午前中に休所中のY保育所に出向いて出前保育を行っている。もともと保育所だったところなので、十分なスペースと遊具が揃っている。訪問したときの内容は次の通り。

10時開始でダンス、母親による絵本読み聞かせ2冊、お話がある。

10時20分からは自由遊び（ブロック、ボール、ダンボール迷路など）である。

休所になった園全体（園庭含む）が大きな遊び場になっている。

11時15分から掃除をして、降園となる。12時には閉門。

この日の参加者は、親9人、子ども12人（1～3歳）だった。母たちは近隣から集まっているわけではなく、車で通ってきているのだが、ほとんどが顔見知りで、子どもの遊ぶ様子を見ながら、親しく話していた。帰りの時間が近づくと、それぞれ掃除をして帰り支度をしていった。

自主的な子育てサークルも2つあり、月2回活発に活動している。活動の様子や○特情報などが、壁面に貼りだされていた。

その他、C保育所では遊びの会（毎週水曜日）、育児講座などもやっているとのこと。

4. D幼稚園・保育所・子育て支援センター（2005年1月21日 訪問）

幼稚園・保育所・子育てセンターが一体化した町立（当時）の施設である。早くから「幼保一体化」を指向し、その結果5年前に幼・保を合築し、そこに子育て支援の機能も合わせ持つ施設として今日に至っている。

子育て支援センターには専任のスタッフが2名配置されている。通信を毎月発行し、活動内容の予定や実施状況を掲載している。親子体験保育（月1回）、新米パパ・ママ教室（新企画）、園の給食を食べてみようなどの支援事業を展開しており、各企画には15～20組の親子が参加している。その他、教育講演会、運動会、夏祭り、餅つき、芋掘りなどの園行事への参加も呼びかけている。クリスマスに40組の親子が参加するなど、日々参加者が増加している現状である。

5. E保育所・幼稚園・子育て支援センター（2005年1月21日 訪問）

町立（当時）の施設で、保育所・幼稚園・子育て支援センターが一体化しており、地域の育児センターとしての役割を果たしている。当初は小学校に併設した保育所としてスタート、5年前に幼稚園と一緒の施設となり、その翌年子育て支援センターと一体となった現在の施設となる。保・幼とセンターは、同じ建物内にあるが、多少離れて位置しており、センターの独立性は強い。施設全体の経営管理等の所管は、町の教育委員会である。

町域が広いこともあり、子育て支援センターは町内の他地区には週1回ずつの出前保育を行っている。子育て教室の登録総数は70組であるが、それを専任職員2名（1名は臨時）で対応している。

6. F保育園・子育て支援センター（2005年2月28日 訪問）

一時保育をはじめ地域子育て支援を積極的に行っている。専用の部屋があり、担当者は2名（兼任）配置されている。多種多様な支援の形態が用意されており、交通至便なこともあり、

地元以外の周辺の地域からも数多くの利用者がある。支援活動のいくつかを以下に記す。

- ①あそびの広場・おはなしの広場（自由参加）
水曜は0～1歳（20組）、木曜は2歳以上（30組） 10時～11時
文庫の絵本を貸し出したり、お話、パネルシアターなどをする。
- ②園庭、屋上、プール（7、8月）の開放
- ③体験保育（予約制） 火曜日9時～12時
0～5歳の未就園児と親が日常の保育に参加する。
- ④子育て相談室
- ⑤子どもの問題ネットワーク作り

7. G保育園・子育て支援センター（2004年12月24日 訪問）

遊ぼう会の利用者が多いので年齢で2つのグループに分けた。現在30-40組ある。宣伝は在園児のお店などにポスターを貼るのみで行っている。自主サークルも近隣に10組近く生まれ、センターが仲介になって相互の協力体制ができている。区役所にも登録しており、保健所にはサークルの一覧表がある。サークルからの要請があれば、月1ぐらいで出向いていく。

とにかく、支援センターが独立してあるので動きやすいとのことだった。子育て支援専門担当者会議というものが、市内公立私立が混ざり合って年2回行われている。約18名が集まって情報交換、遊びの交換等をしている。

今後は、支援センターに来たいが来れない人への誘いについて検討していきたい。また、公園などへの出前保育も考えているとのことだった。

8. H保育園・子育て支援センター（2005年3月9日 訪問）

“子育て支援はその地域の親を見なければだめ”と園長は語る。親を見て親を支援するには保育者の質が問われるので、保育者の質の向上のため園内研修に力を入れている。保育者が学ばないと、子どもの問題から親や家庭のことまで見とおせない。

遊びの会を年間17回開催。終了後は毎回アンケートを参加者に書いてもらいまとめている。他に料理教室、育児教室、育児講座、育児サークル（出張）、子育てサロン、文庫等殆んど何らかの活動を毎日やっている。

2004年度から手芸教室を始め、地域の手芸の上手なお年寄りを巻き込んだ活動も好評である。地域の全体的交流を行っている。地域に一人暮らしの老人が100人くらいいるが、70人くらい登録している。子育てセンター便りを毎月600部カラーコピー印刷して配布し、好評である。赤字運営である。子育て支援を軸にして、地域のあらゆる年齢層を巻き込んで、可能なことすべてを活発に行っている。

9. I保育園・子育て支援センター（2005年2月24日 訪問）

主要な活動に子育てサークルの育成・支援がある。支援事業立ち上げの時期に実施したアンケートから、サークル活動が求められていることがわかった。園内だけでは場所的に限りがあるので（専用の場所はない）、児童館で開催することにした。1993年度、3サークルで始まったが、2004年度は12サークルで、登録は親子合わせて600名を越えた。市内の4つの児童館を使用し、各サークル月1回の実施。担当者が専用の自動車におもちゃを積んで回る。回数を

2回に増やせないでいる中、地域の児童館なのでサークルのない日にも集まるようになってい
る。地域ごとにサークルを作っているよさがある。転勤家庭が多い中、母親に友だちができる
よさがある。

保健課、小児科医、保育ママの会、主任児童員との連携、ボランティアの関わりなど、地域
の結びつきの中で様々な支援活動を展開している。

担当者を3人置いている(専任)。補助金の額では赤字になる。資金面でのバックアップが
必要。また、相談活動についてのスーパーバイザーがほしいと言う。

10. J 保育園・子育て支援センター(2005年2月15日 訪問)

2000年度よりセンターを置いての事業を開始した。親子教室や各種講座、育児サークルの
支援、子育て通信の発行、子育て相談を行っている。専用の空間に支援室とカウンセリング
ルーム、調理のコーナー、トイレがある。担当者は専任2名。担当は年単位であるが、利用者
との関係も大事なので、1年で交替することはない。親子教室の良い点は母親に友だちが
できること。参加を重ねる内に読み聞かせの絵本を落ち着いて見るようになるなど、子ども
に変化が見えてくる。支援室で落ち着いて活動できる規模や駐車場の収容規模を越えて利用
者が多い。2004年度はマタニティ教室を3回実施。離乳食を食べる様子が見られるなど、
0歳児のいる保育園で教室を行う意味があると言う。

さらに、保育園での子育て支援活動について次のように園長は語る。母親に友だちが
できることが子どもへのかかわりにもよい影響を及ぼす。親たちは園の子どもや保育
者のかかわりを良く見ている。たとえば、1歳児も座って食べている姿を見て驚く。
保育者も支援活動をしてみて、保育園の子どもたちが経験していることや育っている
ことに気づく。座って食べるなど、当たり前と思っていたことが保育園でやってきた
ことの積み重ねであることに気づいた。子育て支援を始めてみて、その意味がわか
った。実際に触れてみて、専業主婦が子どもと向き合っ
ての育児の大変さを知った。その人が今求めているものに
応えていくことが大事。こんなことが
と思うようなことも、その人にとっては切実な
こと。たとえば、離乳食について、芋をつぶ
せばいいということがどうすることなのか
わからない。具体的に伝えると「そう
なんですか」と言う。それを聞くと自分
たちがやっていることには意味がある
のだと思う。保育園は子育て
についての専門機関として信頼
されている。そこで
行う支援ということで安心して
利用してもらえる。

11. K 保育園・子育て支援センター(2005年3月3日 訪問)

支援事業は平成11年に開始。専任スタッフ2名で運営している。センターだ
よりを年6回発行している。登録者には配布し、また、行政区長を通して回覧
している。現在、利用者多数。訪問した日も遊びの指導ということで、約25組
55名の親子がホールで活動(キーホルダーと壁掛け作り)しており、人数
の多さに驚いた。普段は隣接する児童館のなかの部屋を、専用の
場所として使っている。園庭は保育園と共有。

出前保育は、他の児童館や地区の住宅内集会所などで各所1回ずつ、計年5
回行った。

育児相談も増えており16年度は20件あった。内容としては、嫁と姑の
関係、義理の父との関係など、家庭内の事柄が多いとのことだった。と
にかく、親たちは相談というよりも話したがっているのではないかと
言う。

12. L 保育園・子育て支援センター（2005年3月4日 訪問）

子育て支援センターは平成13年度からで、現在4年目である。保育園から廊下続きで立派な一軒家のような建物があり、これが子育て支援センターとして機能している。専任スタッフ1名にフリーの保育士が加わって支援事業を行っている。

遊びの会（未就園親子対象）は週3回10：00～11：30。この日は雪が深くて来園者ゼロだった。週3回の内、2回は自主活動にしている。この方が母たちは非常に積極的に活動に取り組んでいる。毎日開放してほしいとか時間延長の希望などもある。

ヴァイオリンコンサートなど文化活動をするのが好評である。もっとしたいが、都市部から遠いため企画・実行は容易でない。その他にも人形劇、学童絵本おはなしの会なども行っている。問題は冬季で、積雪のため駐車場不足になる。

広域のため、まだ閉じこもっている親子への宣伝、案内が重要な検討事項である。現時点では、保健所での健診のときに、総合センターに毎回スタッフが出向き、待合室で各親たちに声をかけてセンターの存在を知らせている（年15回ほど）。さらに奥の集落へは、月に1度、集落センターへ出前保育を行っている。参加者は1～2組。

センターの立ち上げ時は、全戸にアンケートを配付し、他の町の支援センターを参考にした。

13. M 保育園（2005年3月7日 訪問）

5年ほど前から週1回、遊びの会と園庭開放を実施している。担当者は主任とパートの職員1名で、主任は継続して担当している。遊びの会は10時から11時で、専用に使える部屋がある。その後12時までが園庭開放で、在園児は室内で活動するように予め調整している。運動会の総練習などの時には、在園児の保育が優先される。参加者は平均15組ほどで、3分の2は継続的参加者である。広い範囲から参加者がある。自分たちで作ったサークルで参加している様子もある。内容は1、2歳児の参加が多いのでその年齢に合わせている。また、園の行事と連動させている。職員を二人配置することを考えると、週1回が限度である。きばらずにやっているし、これからもやっていくとのことである。

14. N 保育園（2005年2月7日 訪問）

地域のニーズに基づく活動を展開するために、2001年度より地域主任を置いた。保育をしながらではたいへんなので専任とした。他職員と連携しながら支援活動を進めている。取り組みの一つに、子育て葉書通信の発行がある（2002年度より）。生後1か月から18か月まで、月1回、月齢に応じた内容の通信を申込者に送る。市内3カ所の産婦人科に申し込み用紙をおいてもらっている。現時点で40組ほどに発送している。内容は園長と主任が作り、小児科医に医学的な所や発達について確認してもらう。2004年度より、1歳の時、往復葉書で最近の様子、困っていること、要望からなるアンケートをとる。困っていることについては、園長が電話をして相談に応じる。

保育園を知ってもらう目的で地域ニュースを年6回発行し、地域の全戸と在園児の家庭に配布している。その他、行事参加や育児講座等も実施している。担当者を増やし活動の幅を広げるために、センターの設置を計画している。

II 幼稚園

15. O幼稚園（2005年3月7日 訪問）

15年度は、遊びの会を月2回開催していた。幼稚園での支援活動であるが、幼稚園教諭は全員クラス担任で人手の余裕がなく、社協から派遣される2名のサポーターさんと呼ばれる人により行われた。そのサポーターの補助金も切れ、無給のボランティアのシステムに変わり、全く予算が無い。16年度からは月2回園庭開放の活動のみで母親が責任を持って自分の子どもを見る。午前10時には降園してもらう。学期毎に2回くらいは園児と子育て支援できた子どもが体操を一緒にするとか指人形を見るのは可能である。ボランティアの指導が大変である。幼稚園は人手不足で、予算も無い中で諸活動が求められている。町の支援センターがあるので、そちらでの活動を期待している様子である。

16. P幼稚園・幼児教育センター（2005年3月5日 訪問）

幼児教育センターが置かれている。ここでは入園前の幼児を対象とした2, 3歳児の特別クラスを4年前に設置している。専用の部屋もあり、担当の教員（副教務）も配置されている。募集人員は1コース15名の2コース制で、計30名となっているが、希望者はそれを上回るのことであった。保育は木曜日か金曜日の週1回、親子一緒に、時間は10:00～11:00となっている。

このクラス設置の主旨は、①幼稚園で遊ぶ楽しさを知り、集団になじむ素地を育てる、②同年齢や異年齢との交流による情操を豊かにする、③子育ての情報交換の場として活用する、である。入会金（保険料を含む）は1万円、保育料は月3千円である。保育内容はミニピクニック、作ってあそぼうなど、さまざま工夫されている。

17. Q幼稚園（2005年3月4日 訪問）

子育て支援の中心は預かり保育で、朝は7時から、夕方は午後7時まで行っており、朝は無料で、夕方は1回1000円であるが、長期希望者の場合は月14000円となっている。担当者は専任で3名配置されている。

もう一つ力を入れているものとして、親子クラブがある。2, 3歳児の未就園児が対象で、週1回のクラス（16組）が1日2コース、それが月曜か金曜まで毎日、計10クラス設置されている。入会金は3000円で、保育料は月5000円となっている。支援活動専用の場所があって実施している。

18. R幼稚園（2005年3月8日 訪問）

未就園児親子教室を中心にきめ細かい活動をしている。当園では未就園児保育が子育て支援保育の中心である。未就園児保育の専任と兼任の担当者が各1名ずつ当たっている。目標、運営、活動内容等を明確にしている。その日の指導案を必ず書いている。未就園児活動には園の伝統や行事を大切にして取り入れ、それに新しい試みもいれ、いろいろ工夫している。友だち関係や友だちとの遊び等を重視している。

19. S幼稚園（2005年3月3日 訪問）

あそびの会を保育と重ならない土曜日に実施している。そうすることで、場所が使え、職員

がかかわれる。働いている母親や父親も参加できる。対象は2～4歳として募集するが、実際には1歳児もいる。2004年度の対象児は100名で、3クラスに分けて実施した（同時展開）。親子のふれあいを図る内容の活動を設定している。活動前の自由あそびの中で親同士のコミュニケーションが生まれ、友だちができる。

卒園児の父母なども参加する父母勉強会を実施している。母親たちの要望を聞きながら企画する。講演会あり、ネイルアートの講習会ありと内容は多彩である。要望が圧倒的に多いのは料理講習会である。また、託児をしているが、母親たちには子どもから離れて自分だけの時間を持つてることが良いようだと言う。

20. T幼稚園（2005年3月3日 訪問）

遊びの会を始めて8年ほどになる。2004年度は16回の開催。平日の午前に行われ、在園児がクラスで活動する時間にホールを使うなどしている。フリーの保育者がかかわることが多いが、クラス担任の中にも担当者がある。参加者は対象児数で平均32名ほど。登録制ではないが、園外に出向く企画もあり、回によっては予約が必要。会終了後も在園児の活動と重ならない12時頃までは自由に遊ぶことができる。園の遊具を使って外遊びができることが喜ばれている。会は親同士が継続的に会う機会になり、親に友だちができる。幼稚園のことなど情報交換の場になっているよう。親子とも幼稚園に慣れ、入園の準備になっている（この園と限らない）。育児講座を2回行ったが、その間、遊びの会担当者が子どもたちを別のところで見ている。場合によって、PTAの役員が協力している。

21. U幼稚園・幼児教育センター（2005年2月23日 訪問）

専任スタッフ1名（非常勤）が、園舎からは別棟の2階会議室を使って、未就園児クラブの活動を展開している。昨年1年目は週1回のプログラムに30組が集まってしまった。今年2年目は、15組ずつに限定して、毎週水曜日と金曜日に分けた。したがって、1グループ年間33回ずつの活動となる。経費は毎月1000円（おやつ代、教材費）の会費制。年間では7000円になる。

内容は次の通り。10：00～自由遊び（集まる時間もさまざま）、10：30～お話、絵本（母親による）、メイン活動（この日はお雛さまの製作）、11：20～おやつと麦茶、11：30～手遊びとお話。自由遊びの後、11：45解散。その前後、スタッフに気軽に相談などもしていた。

一時預かりのような親子分離型の支援の希望があるが、託児でないことを伝えているとのこと。実際、共に活動していても、母親たちのサロンになってしまう傾向があるので、親たちには目を離さないでほしいと言う。子どもたちにとっては、入園前に園に慣れたり友だちができるのでよい。

22. V幼稚園・幼児教育センター（2005年2月14日 訪問）

平成7年の自主サークル活動からスタートした。都心部とは違う地域性を生かした内容にしないと、継続は難しいので毎年検討しているとのこと。内容は次の通り。

- 子育てサロンは毎週水曜日。訪問したときはバレンタインでチョコクッキー作り。包丁を使って切り、焼いている間にカード作り。参加者は母4人、子ども5人。スタッフ2人がみな膝をつきあわせて、和やかにおしゃべりをしながらの活動だった。

- 満2歳から、週2, 3回のひとり登園(送迎バス有)のクラス。
- 出前保育は、月1で幼稚園や保育園、または、他町の劇場(小ホール)などへ絵本やおもちゃを持って行って遊ぶ活動。スタッフ3+aで出向く。催事場感覚で来る人が多いので、最高70組140人集まったことがある。情報発信の場にもなっているので、検討しながら定着させたいとのこと。独立行政法人福祉医療機構の助成金の交付もある。

この幼稚園では、次年度から認可保育所(6カ月から入園)を開園したり、幼稚園降園後の預かり延長保育や長期休み中の保育、さらに、おもちゃ病院なども併設するなど、実に多様な支援活動を展開していた。逆に、母親たちの自主育児は公的機関でもするようになったので、園では必要なくなり終了した活動もあったとのことだった。問題は、行政と連携をとるのが難しいということ。

Ⅲ 独立型の子育て支援センター

23. W町子育て支援センター(2005年3月7日 訪問)

施設の特徴はひとつの建物を児童館と子育て支援センターが共有し活動していることである。3歳未満の子どもと小学生の活動が一緒になることは運動面の違い等から危険もあるのでその点は配慮している。クッキング広場、おもちゃ広場、絵画遊び、遊びの広場は月1回で午前10時30分から11時30分の時間帯で計画されている。しかし月曜から金曜まで9時から5時がセンターの開放時間となっている。センターを立ち上げて4年目だが暗中模索で行っているとのこと。現在経験のある専任の保育士が担当して2年目である。場所を共有し活動しているのは児童館の臨職の保育士である。相談については専任の保育士が当たっている。相談室は無い。母親への意識的な働きかけが大事だと思っている。母親への刺激とセンターを開放することが大切だと担当者は感じている。

24. X町子育て支援センター(2005年3月4日 訪問)

子育てセンターは4年前に新しくできた町の保健福祉センター内に立ち上げ活動している。活動内容は15あり、主なものとして子育て支援センター便りを年12回発行し、広報と共に全戸に配布している。他には遊びの会、読み聞かせの会、造形遊びの会、地域出張遊びの会、ベビーマタニティ倶楽部、子育て専門心理相談等の活動がある。出前保育は今年度から始めた。町内の地域差が大きく、交通の便が極端に悪かったり、また家庭内の事情でセンターまで足を運べない親子がいることも分かり、スタートさせた。専門的心理相談は年12回臨床心理士がセンターで行う。

活動は保健師と保育士の専任職員の二人がそれぞれの専門領域を担当し行う。活動が活発になればなるほど予算不足、人手不足の問題がある。職種の異なる保健師と保育士がそれぞれの専門分野の特色を生かし、立案し実行しているのが、特長といえる。町を挙げて取り組み、年毎に充実している様子である。

< 考 察 >

1. 保育所および併設されたセンターでの地域子育て支援

保育所や幼保一体となった施設に併設された子育て支援センターでは、多様なメニューでの支援活動が行われ、他機関との連携も進んでいる。しかし、担当者や場所など、限られた条件の中で、利用希望者の増大にどう応えるか課題になっている。現状でも赤字運営という施設もある。地域子育て支援活動へのニーズの高まりに応える財政面でのバックアップが国や自治体に求められる。

ここで場所の条件と活動との関わりを見てみよう。今回、訪問調査の対象とした支援センターは、1園を除き、専用の場所が確保されている。出入り口やトイレも専用で相談室が備えられている所もある。こうした条件が活発な活動を支えていると言えよう。一方、保育所内に専用の場所がない支援センターでは、地域の他の施設を活用することで旺盛な活動を展開している。むしろ、親子の身近な場所でサークル活動を支援することで、親同士の自主的な交流が生まれる結果となっている。センターの施設面での改善を求める一方で、現にある支援ニーズに応える活動形態を創造していくことの重要性を示している。また、専用の場所の有無に関わりなく、親子が参加しやすく、自主的にも集まれるような場所に向いての活動すなわち出前保育の意義も見えてくる。

子育て支援活動の意味として、親に友だちができることがあげられている。母親の不安が和らぐとともに、子どもへの関わりにもよい影響を及ぼすと考えられている。また、母親の教育力が低下しているが、センターに集まることで他の親や祖父母の子育てを学ぶことができると言う。親同士が継続的に交流できる場や育児サークルの育成・支援の取り組みの重要性が確認できる。

ここで二つの園の記録に注目したい。C保育所の出前保育では、母親による読み聞かせが組まれている。母親たちは帰りの時間が近づくと、それぞれ掃除をして帰り支度をしていたとある。また、L保育園の遊びの会は週3回あるが、内、2回は自主活動にしており、母たちは非常に積極的に活動に取り組んでいるとある。親たちが活動に参画する機会を作ることで、親たちの力が発揮されることを示している。

次に、保育所での保育と地域子育て支援活動の関係について考える。まず、地域の子育て支援は保育者の資質向上と密接な関連にあると認識されている。また、親たちは保育所の生活を見ることで子どもの育ちを学び、保育者は園の保育と子どもの育ちを見つめ直す機会になる。地域の親たちと実際に関わる中で、家庭での孤立した子育ての大変さや育児の方法を具体的に伝えることの大切さがわかったと言う。地域子育て支援活動に取り組むことで、保育所の持つ機能や役割を改めて確認することになっている。

センターが設置されていない園も2ヶ所尋ねた。M保育園では今の条件の中でできる支援を続けていこうとしている。一方、N保育園の場合は、センターを設置して活動の幅を広げようと計画している。各園での地域子育て支援活動への取り組みは、さまざまな選択の中で多様な展開を見せていくものと思われる。

2. 幼稚園での地域子育て支援

まず、人手に余裕がなく予算も無い中では、地域子育て支援の取り組みはきわめて困難であ

ることがわかる。幼児教育センターを置いている場合には、専用の場所があり、専任の担当者が配置されている。中には出前保育を行っている園もある。しかし、筆者らの調査では、こうしたセンターが設置されている園は支援活動を実施しているとする園の16.8%であった。同様に専用の場所があると回答したのは31.8%であった（東他，2006a）。多くの園では、訪問園の例にも見られるように、兼任で担当を担い合い、在園児の活動時間との調整を図りながら実施しているものと推測される。

未就園の親子を対象にした活動には、未就園児のクラスの保育と、親子クラブや遊びの会等がある。これらの活動は、子どもにとって、幼稚園に慣れ親しみ、友だちとの遊びや関わりを経験する場と位置づけられている。親にとっては、友だちができ、情報交換ができる場と園側はとらえている。また、親と子の交流をねらいに内容を組み立てる例もある。子ども同士、親同士、親と子という、人との交流が支援活動の主たるねらいになっていることがわかる。

3. 独立型のセンターでの地域子育て支援

保育所とは独立した場所にある支援センターを2ヶ所尋ねた。一方は、ひとつの建物を児童館と共有している。もう一方は、保健福祉センター内にあり、保健師と保育士がそれぞれの専門分野を生かしながら取り組んでいる。臨床心理士による心理相談もある。独立型のセンターの場合、どのような施設との併設か、あるいは単独の設置かにより、活動に特色が出ると考えられる。しかし、予算不足、人手不足の問題は多くの施設に共通する問題と推察される。

4. まとめ

以上、訪問施設を三つのグループに分けて考察してきたが、全体的に見て言えることの一つは、地域子育て支援活動へのニーズは実際に増大しているということである。活発に、また、きめ細やかに活動を展開すればするほど、利用希望者が増えていくようである。こうした中でセンターの体制を充実させていくことはもちろんであるが、親たちが自主的に活動できるよう援助することがますます重要になっていると言えよう。子育て支援活動の大きな意味は、さまざまな親子との交流を通して、親子に友だちができることにある。親たちの自主的な活動と友だちづくりは一体となって進むであろう。それを支援することが地域子育て支援活動の主要な課題であることが確認できる。

保育所や幼稚園で在園児の姿を見ることは、親たちにとっては子どもの育ちや子育てについての見通しをもつことにつながる。子どもにとっては行動のモデルにもなるであろう。また、地域の子育て支援に取り組むことは、日常の保育を向上させることにもつながる。地域の子どもにとっても親にとっても、また、支援に取り組む園や職員にとっても意味のある活動を展開するために、施設の種類を問わず、予算の確保が課題になっていると言える。

<文 献>

- 1) 杉山弘子・東義也・石田一彦・佐藤陽子「宮城県における子育て支援の実態（1）－ 保育所における地域子育て支援活動－」『尚綱学院大学紀要』第52集，pp. 29-42, 2006a
- 2) 杉山弘子・佐藤陽子・石田一彦・東義也「宮城県における子育て支援の実態（3）－ 保育所での地域子育て支援活動の問題点と課題－」『尚綱学院大学紀要』第53集，pp. 37-47, 2006b
- 3) 原田正文『みんな「未熟な親」なんだ－グループ子育てのすすめ－』農山漁村文化協会，1999
- 4) 原田正文「子育て現場の実態に即した次世代育成支援策を！－「大阪レポート」から二三年後の子育て実態調査「兵庫レポート」が示すもの」『発達』通巻第101号，ミネルヴァ書房，pp. 24-27, 2005
- 5) 東義也・杉山弘子・佐藤陽子・石田一彦「宮城県における子育て支援の実態（2）－ 幼稚園における地域子育て支援活動－」『尚綱学院大学紀要』第52集，pp. 43-52, 2006a
- 6) 東義也・石田一彦・佐藤陽子・杉山弘子「宮城県における子育て支援の実態（4）－ 幼稚園での地域子育て支援活動の問題点と課題－」『尚綱学院大学紀要』第53集，pp. 49-57, 2006b

<謝 辞>

訪問調査にご協力下さいました宮城県内の保育所、幼稚園、子育て支援センターのみなさまに深く感謝申し上げます。